

公文教育研究会蔵『七夕』の翻刻並びに解題

勝 俣 隆

A Reprint and Bibliographical Introduction to 'Tanabata',
a Medieval Tale in the Kunon Education Research Collection

Takashi KATSUMATA

凡 翻 例 刻

一、この翻刻は公文教育研究会が所蔵する中世小説『七夕』（奈良絵本三冊）の全丁を、原本に基づいて出来る限り忠実に翻刻したものである。

二、翻刻に当たっては、次の方針に拠った。

- ① 漢字・仮名の区別を初め、仮名遣・宛字等は、すべて原本通りに活字化した。
- ② 従って漢字の字体は、原本における使用例に従って、旧字体あるいは、略字体を使用した。
- ③ 誤字・脱字などは、原本のまま記し、特に問題のある場合のみ、その右側に括弧を付して、細字で注記を加えた。
- ④ 原本に付された訂正は、出来る限り原本のまま翻刻し、「テ」と仮名を振って注記した。
- ⑤ 本文には、句読点は施したが、濁音表記は付さなかった。
- ⑥ 原本にも濁音表記はない。
会話文、独白文・心中表現とも、原則として、「」及び「」を付けて示した。
- ⑦ 「く」「こ」等の踊り字の符合は原本通りのものを用いた。
- ⑧ 歌は、字の文より上の句も、下の句も二字ずつ下げて書き出し、二行書きにした。これは原本と同じ書式である。
- ⑨ 本書には挿絵が完備している。末尾に全一五図を縮小して掲載した。なお挿絵の前の散し書きは、特に区別して示さなかった。
- ⑩ 丁数は、原本の装丁に基づき、見返し・遊紙を除くすべての丁数を数えることにした。従って、上冊の本文が開始する墨付の丁を第一丁とし、原本の丁の表・裏が終わるごとに、「」記号を付し、その下に、丁数を示す漢数字と、オ（表、ウ（裏）の略号を付した。中冊、下冊も同様である。

七 夕

遊紙（二丁分有り）

それわかつてうは神代よりはしまりしんむ天わうを人わうのはしめとして國土のはんみんな此すゑにつゞけり。されは神國なれはかりに人間とむまれたまふといへとも又神とけんし、諸人のわさはひにかわりたまふ事有かたき御ちかひなり。しかるに、天にまし／＼て、ふうふのちきりを、ふかくまもらせ給ふ、たなはたのゆらいを、くはしくたつぬるに、しんむ天わうより三代のみかとの御宇にあたつて、長しや一人おはします。此「一才

（脱文アリ）事、まことの人とはいひかたし。たゞよろつ世までも、

かはらぬちきりこそあらまほしけれと、明くれ、ねかふといへともそのかひあるへきにあらす。こゝろにまかせず、年月をそおくり給ひける。」一ウ（挿絵第一回「長者の三姉妹登場場面」、二才）

さるほとに、おと姫の、つねにねかひ給ふこゝろ、天にやかなひけん、ふしきなる事こそいてきたれ。有時長しやのまへのなかるゝ川へ、めしつかひける下女出て、何となきいつくしきくちなわ一つ出て、ほそきこはねをあけていふやう、「我そなたをたのむ事あり。かなへたひたまへ」といふ。女是をきゝ、「こはそもおそろしや、くちなわの身として、人のことくにもものいふ事有へき事ならねは、とかうの返事もせず、はしりのかん」とせしとき、かの「二ウ

くちなわ、けしきかわりて、うろこさかさまになり、まなこをいからかし、すてにとひかゝらんいきほひみえければ、おそろしなから、のかれぬ事と思ひ、又たちかへり、「いとやすき事にて侍るそや、身つから心にをよふほどの事は、かなへてまいらせん」といひければ、くちなわ、うれしけにて、くちのうちより、いつく

しきたまつさ壹つはきいたし、「此ふみ長しやにみせよ」といひけり。おんな、いよくおそろしく、「こゝろへぬことなり」と思ひければ、玉つさを「三才

うけとりて、いそきはしりかへり、「しか／＼」とて、まいらせぬ。

御そはちかき女房、うけとりて、長しやに、此よしをかたり、ふみを奉りけり。ちやうしやおとろき、まつうわかきをみたまふに、けにもものあさやかなる事、まことにんけんの手すさみともみえず、をしひらきはいけんしければ、其ふみにいわく、「むすめ三人のうち、我に心さしふかゝらんを一人ゑさせたまへ。しからはいよくいゑとみさかへ、行すゑなをもめてたかるへし。もし」三ウ

又こくうの事とおもひ、此事いなどならは、七代まで、そのいゑをほろほし、たちまちめのまへにて、うき事をはやくみすへし。せういんにおゐてははやく川はたに十四けむ四めんののつりとのをたて、よの人ひとりもいれず、ひめ一人をそなへよ、あなかしこ」と、かきとめたり。長しや、これをみて、「こはそもいかせん。さらにまことゝおもはれず」とて、かのおんなを御まへによひいたし、くはしくことのやうをたつねければ、いつわり「四才

ならぬよしを、かたく申ければ、たゞあきればて給ひ、ちゝはゝ、しもへまで、なきかなしむ事かきりなし。」四ウ（挿絵第二回「下女が大蛇の手紙を長者に渡す場面」、五才）

父母さしつとひて、「たとひみかとのせんし成とも、心になはぬ事は、そむきたてまつるは、つねのならひなり、これは、ゆくゑもなき物に、思ひこめられて、とかくいふにおよひかたし。まつ此よしを、むすめともにかたはらや」とて、三人の姫たちをよひいたし、「しか／＼」ときこえければ、一のひめ、此よしをきゝて、

「うらめしきおほせかな、たとひめのまへにて、うき事にあふとても、いかてかしやしんに身をまかせん。此事かなふへきとおほえす」とて、身をわな「五ウ

わなとふるひ、きへいるこゝちして、きぬひきかつき、「思ひもよらす」とて、なきにけり。「さらば、中のひめはいかに」と、のたまへは、「あねきみのおほせらるゝことく何とかはなるへきそ」とて、すゝむけしきも、なかりけり。ちゝはゝも、もつともことわりとおもひたまへは、「たゝもろともにいのちをうしなふへきなり」とて、かさねてもとひたまわす、なくよりほかの事そなき。おとひめは、つくくときゝて、「さのみなけかせたまひそよ。それにんけん」六才

のならひにて、けふはたのしみさかへ、あすは又おとろへ、あしたにむまれ、夕へにしす。いのちのきは、さためかたし。われ、いたつらにくちなむいのちを、ちゝはゝしそのために、うしなひまいらせんは、なにのうらみかのこるへし。みつからとかくいふならば、いまゝてたのしみさかへし人々もみなおとろへはてゝ、おもはさるに、ちゝはゝ、はらから、ともに、こゝかしこにまとはむ事、うたかふへきにあらす。そのときは、くゆるともかひあらし。みつからこそまいらん」と「六ウ

て、思ひ入たるありさまは、けにたのしみさかゝるかな。ちゝはゝともに、あはれとおほしめしければ、とかくの事ものたまはず、たゝなみたにこそはむせはれけれ。ことほりなるかな、此姫は、すかたかたはいふにをよはず、こゝろさまのかしこき事は、一をきゝて十をさと、しいか・くわんけんのみちにくらからず、たゝあけくれはふつしんをたつとみ、かうくをもとゝせり。かゝるいとをしきひめを、めのまへにてうしなわん事、たとひ我身はほろ」七才

ふとも此姫をそなへんこと、おもひもよらす」といひもはてぬに、いつくともなく、なかひつ一えたもちきたり、ひろにはにおろし、「物申さん」といふ。おとひめまうけの人々あやしくおもひ、「いつくよりの御つかひ」とて、出あひければ、「ためのつかひなり」とて、かき入たり。「七ウ（挿絵第三回「三女の大蛇への嫁入りを人々が嘆く場面」、八才）

長しや、此よしきくよりも、さては、しんつうしさいにて、くたんの事を、はやしりかくはあるらん、なけくにかひなき事なり」とて、ひめ君のいてたちをこそ、いとなみ給ひけれ。なかひつをみたまへは、十二ひとへのしやうそくこそ候ひける。さて、あるへき事ならねは、あまたのはんしやうをあつめ、時分をうつさす、かの川はたに十四けん四めむのつりとのをたて、おとひめに十二ひとへをきせまいらせ、まゆのけはひ、うつくしく「八ウ

して、さしきにそなへたてまつり、一もんけんそくもなこりをおしみて、「あひかまへて、かゝるうきめにあふ事も、せんせのなす所なり。心をくれたまふなよ。たゝほとけの御なをとなへ、のちの世をねかふへし。すゑのつゆ、もとのしつくとなる事も、おくれさきたつためしなり。ついにはおなしはちすをまつへきそや。さのみなかいして、うき事やあらんすらむ」とて、なさけなくも、ひめきみをふりすてゝ、ちゝはゝ・きやうたいもろ共「九才に、立かへらんとしたまへは、ひめきみ、あまりのこゝろほそさに、「しはしとゝまり給へかし。我いかなるしゆくゑんにて、かりにおやことむまれいて、かゝるうきめをみせ奉る事かうかうの云ナシこそ、よみちのさわりともなりぬへし。これをほたいのたねとして、こしやうをねかひたまへ。おやこは一世ときくなれとも、ほとけの御めくみあるならば、又もやめくりあふへきなり。されはつたへきく、しつた太子は、なん」九ウ

天ちくのあるし、しやうほんわうの御子として、あめか下の事、こゝろにかなわすといふことなし。されとも、はゞにはやくおくれたまひしにより、たすけたまはんそのために、たんとくせむむにとひ行つゝ、せんにんにつかはれて、しんみやうをおします、水をくみ、たきゝをとり、十二年かそのあひた、なんきやうくきやうしたまひて、のちつゐに、しやかむにふつとなりたまひ、しゝたまふはゞに二たひあひ給ふ事、これ、かうくのゆへそかし。みつからも、おやの」十才

ためにかくなりゆく事は、いま一たひのなけきなり。ついには又よろこひとも、なりぬへし」と、さもおとなしくはのたまへとも、なみたはすゝむはかりなり。「ひめきみ、思ひつゝけて、かくなん」十才（挿絵第四図「三女が父母に暇乞いをする場面」、十一才）

一世たにちきりもはてぬたらちねの

なみたのたねにさきたつそうき

とかく、時うつりければ、やうくねのこくはかりになりぬ。「今はこれまで」と、いひもはてぬに、川なみしきりにたつて、さやかなる月、にわかにかきくもり、神なりさわき、いなひかりして、雨しやちくのことし。人々おしきなこりもうちわすれて、我さきにとそにけかへりける。

そののち、川中より、ひるのことくにひかりかゝやき、なみのうちより、たけ十ちや」十一才

うはかりなる大くちなわいてゝ、すこしもためらはす、ひめ君の御まへにかうへをうなたれ、くれなひのことくなるしたをいたし、いきつきけるありさま、おそろししともいふはかりなし。まなこは、あさ日の山のはより出けるに、有明にしにかたふきて、ひかりをあらそふことくなり。されとも姫君、おもひまうけたる事なれば、すこしもおとろきたまはす。「なんち、こゝろあらは、しは

らくものをきけ。みつからはちゝはゝにかし」十二才

つかれ、人にたにたやすくまみえん事をいとひしに、なんちはいかなれば、しやしんの身として、我におもひをかけゝるこそふしきなれ。さて、なにのさまにてか、我をはこひけん、すみやかにさんけして、とくうしなへ」と、のたまはへは、くちなわいふやう、「われになおそれたまひそ。これもせんせのしゆくこうふかきゆへなり。ねかはくは、我かうへをたちわりてたひたまへ。まことのすかたをあらはさん」といひければ、そのとき、ひめ」十二才

君、まもりかたなをとりいたし、かうへをふたつにきりたまへは、いきやうくんして、ひかりかゝやくとみえしか、いくわんたゝしくしたる雲の上人出たまふ。ひめきみ、かほふりあけてみたまふに、此世ならぬふせいなれば、いつしかおそろしかりし事もわすれはて、れんほのおもひになり給ふ。」十三才（挿絵第五図「三女が大蛇から現れた天稚御子と出逢う場面」、十三才）

かくて、くちなわは、たちかへり、川のそこにそいりにける。雲の上人は、つりとものにとゝまりて、ひめきみのそはへよりそひ、いつしか、ひよくのかたらひをなしたまふ。その夜のうちに、十四けんのかりやすなわち、くうてんろうかくとなり、七ちん・まんほう、みちくゝて、さなからせいりやうてんしゝいてんのたのしみをゑたまふ。いつくよりかきたりたまふらん、天女のことくなる女房あまたひめ君にみやつかへたてまつり、なに事もこゝろにかな」十四才

わすといふ事なし。ひよくれんりのちきりをこめ、かたときもたちはなれたまはす。姫きみ、のたまふやう、「御身いかなる人なれば、かくありかたきありさまをあらはし、我にかたらひたまふそや。つゝますかたらせたまへ」ときこゆれば、「今はなにをかつゝ

むへき。われはこれ天上にすむあめわかみこといふものなり。されはおん身のこゝろさしのせつなる事にひかれて、かりに人かいにくたり、おほえすちきりをこめ」十四ウ

侍る事、あさからぬためしなり。されは、いつまでつたなきくにすむへきにもあらず。いまは天上にかへらんとおもふなり。いま七日すきは又まいりあふへきなり。これこそわすれかたみにのこす」とて、いつくしきからうと一つとりいたし、「かまへて此ふたあけたまふなよ。もし此ふたひらきたまは、ひきやうしさいのくもたえて、二たひ下る事あるへからず。ちきりふかくましまさは、あまちはるかにたつねたまへ」とて、」十五オ

立わかれむとしたまへは、ひめきみ、「こはなさけなきおほせかな。ちよも八ちよも、かはらしとこそおもひしに、あさはかなしきこと、うらみてもあまりあり」とて、御たもとにすかりつき、なみたをなかしたまへは、「いやとよこゝろのかはるにあらず。しかりといへともまたともなひかへるみちにてもなし。」とて、たち出給ふとみえしかは、川のおもてにしうんたつて、天人おんかくをそうし、御むかひに、あまくたり」十五ウ

たまへはしうんにうちのり、こくうにあからせたまひけり。(上冊終り)」十六オ

(中冊始まり。遊紙一丁分有り。)さるほとに、長しやふうふは、かゝる事とは夢にもしらせたまはず、「いまははや、姫君はむなしくなりてやあるらんか、しやしにとられていつくへかまよひゆきてもありけるか」となきあかしたまへは、二人のむすめも、もたへこかれかなしみたまふ。「こゝにてなけきあかしても、そのかひもあるへき事ならねは、われ／＼かの川はたにまいり、いかになりたまふそみてこそまいり候らはめ」とて、夜のあくるをまちなね、いそきくる」中冊一オ

まをとゝろかし、二人もろともに、有し所へゆきたまへは、はしめにはひきかわり、にわにはきんきむのいさをしき、しつほうをちりはめ、くうてんろうかく・たまのきたはし、さなからこくらくしやうともかくやとおほえてありかたし。こはいかにゆめにみちゆく心地して、うつゝとはさらにおほえす。くるまをさしよさせみたまへは、姫君は、女御かうゐのことくにて、あまたのうへわらはにかしつかれ、たゝうちしほれて、ものおもひたる」一ウ

ふせいなり。二人のあねひめたちは、する／＼とたちより、うれしきにもなみたさきたちて、ありしうき事ともを、かたりたまへとも、ひめきみは、わかれしすかたの身にそひて、つや／＼物ものたまはねは、二人の人々、「かやうにめてたきさいわひのうへに何かおもひのましますそや。うらやましのひめ君や。われ／＼こそあねなれは、このさいわいにあふへきものを」と、ねたむ心もおほかりけり。こゝにまたいふにいはれ」二オ

ぬうつくしきはこ一つあり。此はこのうちこそゆかしけれ」とて、ふたをあけんとしたまへは、ひめきみ、「それこそいみふかき箱なれは、たやすくあけん事こそ、おそれなれ」とて、しは／＼、とめたまへとも、「なにのさはりかあるへき。いかばかりかうつくしきものの入たるらんにみせ給へ」とて、ふたをしあけてみてあれは、らんしやのほひのみかうはしくして、入たるものは、なかりけり。「さらは、とくふたをしたまへ」とありけれども、そこをばら」二ウ

ひてみたまへは、うちよりうす雲たちのほり、こくうへあかるとみえければ、くうてんらうかくも、みなもとのことくのつりとのとなり、せいし・くわんちよも、きえうせて、夢のさめたることくにて、夜はほの／＼とそあけにけり。」三オ(挿絵第六図「三女

が女御のようにかしずかれているのを姉二人が嫉妬する場面、三ウ

いたわしや、ひめきみは、たゝはうせんとあきれはて、いまゝては、またくる七日をまちけるに、なさけなくも、ひきやうのくもか、きえさせたまふかなしきよ。けにや、ろせいかみしいそちの夢のたのしみも、たゝ一ねふりのうちそかし。これにんけんのうゐむしやうをしめし給はん、ほとけのはうへんと、おほえたり。かゝるはかなきうき世になからへ、なにをたのしみ、なにをかうれふへきや。こんくしやうとのいとなみこそ、まことのみちともなる」四オ

へき」と、おもひさためてましくければ、二人のあね姫君此よしを御らんして、あきれはて、申されけるは、「御身ふしきに御いのちなからへさせ給へは、めてたきに、なにしに、うらみかほにみえ給ふそや。ちゝはゝの思ひにしつみてましませは、とくかへらせたまひて、みゝえんとは、おほしめさすや」とて、ふしつみてまします、さてあるへきならねは、ひめきみをいたき、くるまにのせたてまつり、ちゝはゝの御まへにまいりたまふ。さ」四ウ

れは、うらしま太郎か七世のまこにあふたるこゝちして、こよひ一夜は、ちよをあかすよりもなかくりけり」とて、いたきつきて、よろこひたまひ、「いかにく」とのたまへとも、たゝうちしほれてそおはしける。」五オ（挿絵第七回「父母の許に連れ戻されても三女が天稚御子失踪を悲しむ場面、五ウ）

其日もやうくくれば、ひめきみは、ひとま所にひきこもり、きぬひきかつきて、ふしたまへとも、いをねもこゝろにいらされは、ありし夢人の御おもかけの、身にそひて、心もそらにあくかれ、たへてなからふへきならねは、「よいいつわりなりとも、おほ

せにまかせてたつねみはや」とおほしめし、ちゝはゝにもしらせたまはす、つねのすみかをたちいてたまふか、「いかになけかせ給はん」とおもふにつけて、一しゆのうたをよみおき給ふ。」六オ

おもひきやうきたまのををなからへて

むすほゝれぬるなけきせんとは

かやうにかきとゝめ、きちやうにむすひつけ、そゝろにうかれ出たまひける。かの川のほとりにたゝすみ給ふに、みきわの姿は物さひしく、よせくるなみもとすこく、いつくをそこともおほえぬに、川かみにあたりて、ともし火のかすかにみえければ、それをたよりにたゝひとり、たとるくくとゆきたまふ。夕かほの花さきみたれ、いろかほもえな」六ウ

らすみえければ、しはしたちより給ひて

ちきりしいかにむなしきことのはの

花なつかしき君のゆふかほ

とうちなかめたまへは、そことなくけふり一むらたちのほるをみたまひて

君かすむあまちときけはなつかしや

けふりとなりてあふよしもかな

かやうに多いし、そらをのみなかくておはしければ、かのけふり、ひめ君のまへにちかつき、おのつからくうにあからせ給ふ。」さてはちきり」七オ

たえせぬものかは」と、たのもしくこそおほしけれ。そのおりふししつのもとも、此ひめきみを見あはせ、「さてもありかたき事かな。天人のあまくなり、たゝいま天上にあからせ給ふを、おかみたてまつる事のありかたさよ」とて、あやめもあかすまもりゐたりける。さるほとに、やうくけふりあつく立のほり、むらさきの雲となり、あまちはるくへ行ほとに、にんかいもはやとをく

なりぬれば、雲一むらのうちひかりさしてみえければ、かふりそく」七ウ

たいたまへるひと一人あり。「さては、はや天上なるらん」とうれしくおほしめし、かのくもにのりうつりさしよりてとい給ふやう、「あめわかみこのゆくゑやしろしめしけん」と、ゝひ給へは、こたへていはく、「こゝはまたにんかいにちかき所なれば、さやうの人は、いま一天のうへにこそおはすなれ。われは夕みやうしやうとて、またよひにせかいをてらすほしなり」とて、雲にのほりて過ぎせ給ふ。」八才（挿絵第八回）「三女が天稚御子を尋ね昇天する場面。尋ねるべき天稚御子の面影が明瞭に見えている。」、八ウ）

又ある雲にうつりたまひ、しかく／＼とひたまへは、「是ははうきほしとて、世のわさはひをしめし、しゆしやうのきつけうをしるほしなれば、みな人あくしやうとて、つねはかくれ侍るなり。いかてか雨わかみこのおはしますてんへはいたらむ」とて、うちとをりぬ。さて又そこをすきて、くものうちそこはかとなくひかりければ、これなん君のめされけむと、のりうつり、みたまふに、いつくしき天とうし七人のり給ふ。「いかに此うちに「あめわか」九才

みこやおはしますらん」とのたまへは、「われ／＼はこれすまるほしとて、かやうになみゐて、ひとりもかけてはかなはぬ身なれば、外のくもにのる事なし。いま一天のうへにこそあめわかみこはおはしける」とて、ゆきすきぬ。姫君、「あらあさましや。身つからにんけんの身として、やことなき雲のうへ人に夢のちきりをこめなから、その名こりをわすれかねて、したひたてまつるとも、いかて二たひまみえおはしません」と、なみたゝゝもにうかれ」九ウ

給ふ。又、たまのこしにのりたるとうしにあひ給ひ、「雨わかみこ

のおはします所をしらしめされてさふらはゝ、みつからにをしへてたひ給へ」とて、なきかなしみ給ふ。「あらいたはしや。これよりは、またはる／＼の所なり。水の天をこえ、こん／＼るりのちに玉をみかき、にしきをかさりたる所こそ、あめわかみこのすみたまふ天上なり」とて、をしへ給ふ。ひめきみ、なのめならすおほしめし、「御身いかなる人なれば、我をあはれみ、かやうにくはしくおし」十才

へ給ふそや」「我はこれ、あかつきのみやうしやうとて、五かうの天にをよふ時日かけにさきたつて、三かいをてらすほしなり。御身、わかためにあかつきことのつとめおこたらす、いのりたまひしこゝろさし、いま又そのほうをんに、おしへ侍るなり」とて、なを／＼ねんころにかたりたまふそありかたき。さるあひた、ひめきみは、をしへのことく、風にまかせて行たまふほとに、こゝこそ風天のさかひとおほへたり。大そらの雲たえて、かせの」十ウ

はけしき事、みつはのそやをいることく、ここにいたりて「いかせん」と、四方をみまはしたまへは、さうかいのなみ、まん／＼として、さらにほとりもなく、水のそこには、とくしや・あくきよ、うろこをたて、くちよりくわゑんをはき、まなこのひかり日月のことくなり。そのとき、ひめきみ、こゝろのうちにきせいしたまふは、「南無や日のもと（原文ガクローウ）の大小のしんき、此たひ、ふうふしうちやくにおかされて、ほんふの身として天上にまよひゆきし事、しや」十一才

あんの御とかめのかれかたしといへとも、一たひは、ちゝはゝのために、身をおします、すてしこゝろさし、いかてか、「たなこゝろをあわせて、こくうをおかみ給へは、いつくともなく、にしきのことくなる五しきのひかり一すちさしければ、へう／＼たるな

み、さうにわかれてみちみえたり。「これそあやまたぬ神の御ちかい」とよろこひたまひて、かのひかりにのとおもへは、いとをもつてひくかことく、へんしのほとに、水天しんやのことくなる所を」十一ウ

すきたまへは、又壱つのせかいあり。日月つねのことくにあきらかなり。これそたうり天とおほしくて、もろくのほとけはくもにせうして、くわんけんをしらへ、ありかたしともいふはかりなし。こゝに天人一人にゆきあひ、「いかにあめわかみこの御ありかはいつくにてましますそ」とたつね給ふに、「いますこしゆきたまへ。ろくちにつゝきたる所」十二才

こそは、みこのきんちうなり」とそ、をしへ給ふ。」十二ウ

〔挿絵第九図「三女が天女に天稚御子の行方を尋ねる場面。十三才」〕

姫君、うれしくおほしめし、いそきたまへは、けにも金銀のいさをしき、くうてんのみきはには、くせいのおねをうかへ、かれうひむは、つはさをならへ、ほうわうは、たけのはやしにまひあそひ、四きさうせつは一時にあらはし、こかねのいらかのきはには、むめのにほひかうはしく、かさねさくらにをそさくら、かたへちりてさきみたれ、みなみのはの木々のはゝ、しけりあひたり。うの花、かきつはた、山ほとゝきすこゑそへたり。にしの」十三ウ

ぬまには、たいゑきのふようあたかに水をはなれ、くわうきく・しらんの秋の野はむしのこゑくほのめきけり。いつしかもみちはいろをそへ、にしきの山の、ことくなり。北のたかねにはゆきしろたへに風さむし。花ふり、をんかくこくうにきこへければ、こくらくせかいを、まのまへにおかみけるこそ有かたけれ。

おほくのくわいらうをゆき過て、「こひしき君はいつくにかまします」と、宮のうちをさしのそきたまへは、あめわかみこ」十四才

こそおはしけり。うれしさこゝろもきゆるはかりにて、するくとはしり入、「いかにみつからこそ、是まであくかれまいりたり。つれなくも、すてさせ給ふものかな」といひもはてす、御ひさのもとにふししつみたまへは、みこもうれしけにて、「さても、これまたたつねたまはんとは、おもひもよらさりけり」とて、なをしの袖をぬらしたまふ。しはらくありて、ひめきみ、なみたをおさへて、申されけるは、「みつからいやしき身のいかなるしゆく」十四ウ

えんにや、露はかりのちきりをこめたまひ、夢のやうに、またも、みえたまはさる事、うらみてもあまりあり。されは、せんせのかいきやう、つたなきゆへに、けかいのにんけんとうまれけるこそかなしけれ」と、かきくとさきこゆれば、みこもあはれなることはにこゝろみたれ、「されはとよ。わすれたりてんにもあらね、それ天上のならひととして、かりにも人けんにまみゆる事かたし。されとも、御身ゆうなるなさけにひかれて、あまくたると」十五才

いへとも、つゐにそひはつへき身ならねは、こゝろならすもうちすてぬ」といつはりなくのたまへは、「十五ウ〔挿絵第十図「三女が天稚御子との再会を喜ぶ場面」、十六才」〕

ひめ君、御ことはのありかたさに、此ほとのおきおもひもわするゝ心ちして、ゑんわうのふすまの下に、枕をならへ給ふ。さるほとに、かゝるめてたき天上にも、五すい三ねつのくるしみとて、うき事こそ出きたれ。しゆみのはんふくをりやうするそくさむわうとて、きしんあり。もとよりしんつうしさいの身なれば、此事をきゝ、雨わかみこのまへにきたつて、まなこをいらたてゝいひけるは、「いかなれば、けかいのにんけんをこれにはとゝめ給ふそや。天上と申は、佛のくにゝて侍れば、ほんふの身をかへ」十六ウ

すしてきたる事、かいひやくより此かた、そのためしなし。いそきをつきたし給へ」といかりければ、みこのたまはく、「なんち、まどんの身として、我まへにせひなくいたらむ事、天のおそれはいかゝせん。」とて、扇をもつてうちたまへは、御まへをたち、「つゐにはをつかへし申へし」とて、かきけすやうにうせにけり。ひめ君、あまりのおそろしさに宮をかへてそすみ給ふ。十七才（中冊終り）

（下冊始まり。遊紙一丁分有り）そもく此あめわかみこと申奉るは、ひるはたうり天にましますといへとも、よるはにんかいをてらし給ふみやうれんしやうといふほしにておはしければ、くれぬれは、一天さかりたまふ。ひめ君をはありし所にのこしをきて、出給ふ時に、かのきしん、ひまをうかゝひきたつて、ひめきみをさいなむ事こそおそろしけれ。なんちしうしやくふかく、此所にきたる事、天上のけかるゝこそ、きつくわいなれ。いさゝせ給へ」とて、いたはしくもひめ君「下冊一才

の御手をひつたて、しゆみせんにとひ行ける。姫君は、「こはそものちをうしなわるゝよ」とおほしめしけるか、さはなくして、（欠落アリ）千ひきのうしともかうへにのそみしなり。此うしを野へにつれてゆき、くさをかふへし。これかなはすは、いのちうしなはん」とせめければ、ちからおよはす、牛やのまへにてなきしつみ給ふ。「なにとしてならはぬわさをすへし。せめて五ひき三ひきならば、いかにもつれていつへきに、千ひきのうしの我まゝにはなるへき」一ウ

とひとりことしてかなしみたまふ。「まことやきく事あり。「あめわかみこ」とたにとなふれば、よろつのしやうけをまぬかるゝときゝけん物を」とて、うしやのまへにて、「あめわかみこく」と、となへたまへは、千ひきのうしとは、野邊にいてゝ、思ふまゝ

にくさをはみて、又、もとのうしやに立かへりける。きしん、これをみて、「あらふしきや。にんけんとはいひなから、たゞ人にはあらし」とおとろきける。やうくしのゝめのそらもあけかたになりければ、「二才

（挿絵第十一図「三女が牛を飼う難題をこなす場面」、二ウ）（脱文あり）しこくうつさす、きしんきたつて、姫君をちうにつかんで、鳥のとふかことくに、しゆみせんのすみかにつれてゆき、あるくらのまへにひきすへ、「なんちあのくらの内に千石の米あり。へんしのほとに、こなたのくらへはこふへし。さなくは、いのちをうしなわん」といかりければ、「かなはし」とおほしけれとも、をしへのことく、袖をとりいたし、三とふりたまへは、いつくともなく大きなありわき出て、かのくらの米をくはへて、一時のうちにはこ「三才

ひけり。きしんは、くらのまへにて、さんきをもちて、てんけしけるか、いかゝはしたりけん、「米一りうたらす」とて、ひめきみをせめければ、あまりのかなしさに、たちあかり、あたりをたつね見給ふに、けにも手あしのそんしけるありか、こめ一りうくわへて、よろほいきり。「これかやさんようのふそくは」とのたまへは、おにもさすかたうりにせめられて、あきればたる有さまなり。「三ウ、（挿絵第十二図「蟻が米の運搬を手伝う場面」、四才）かくて又、あけかたになりければ、ひめきみをいたき、もとの所にきてかへりけり。みこ、かへらせたまひて、「こよひはいかに」ととひたまへは、「されは、なんきの思ひをなすといへとも、御をしへにしたかひて御袖をふりければ、さらにしさいなし」とかたりたまふ。みこきこしめし、「今二よ三よのそのあひた、いかなる事の侍るとも、身をいたみたまふな」といさめをきて、またくれぬれば、みこのいてたまふとひとしく、きしんきたつて、いさ」

四ウ

なひゆき、うちたゞき、さいなむといへとも、身をくるしみ給ふけしきもなし。おに此ありさまをみて、「なんち女なれとも、つれなきつらたましいや。おそれんほとせめん」とて、四方をとちたるくらをひらきければ、たけ三しやくはかりなるむかていく千万とかきりもなく、くらよりはひいてたり。いたはしけもなく姫君をとつてひつたて、くらのうちへなけ入て、をのれはくらのまへに、はんをしてこそいたりけり。むかてひさしく」五才

らにこめおきたる事なれば、人かのかうはしきをよろこひ、ひめ君の御手あしにとりつきけるを、かの袖をもつて、三とはらひたまへは、おそれてさらにはたらかす。むかてのあし、うをのかりにあかれることくにて、いきつきかねたるありさまなり。さしも、しんつうしさいのおにといへとも、せむへきしゆつほうつきはてゝ、「いかゝしてかなやまさん」とあんしけるに、それも又あけななしければ、みこのかへらせたまはんをおそれ」五ウ

て、又、ちうにつかんで、ひつさけ、宮の中になけ入て、我身はしやはへそかへりける。

ひめ君は、かのあたへ給ふたをもつて、よろつのなんをのかれたまふといへとも、あらけなききしんにつかまれて、こゝろもよはりはてたまふ。「よし／＼これとても、人のなすわさならす。

されは、仏のときたまふしうちやくのまうねんつもりて、すなはちあつきとなり、其身をかいすといへり。さらになけへきみちにあらす」と、身つから」六才

さとりをひらき、きみをおそしとまちたまへは、みこかへらせたまひて、「過し夜はいかなるくるしみをかうけたまふらん」と、なつかしけにてかたらひたまへは、つみもむくひもわすれて、「さてもいつかは此なんをのかれ、一よのむつこともあらまほしさよ」

とくとき給ひける。」六ウ（挿絵第十三回「天稚御子が三女を慰める場面」、七才）

又、日もくれぬれば、みこ、よるのつとめにいてたまふ。その夜はすてに七日にまんする夜なれば、きしん、もろ／＼のあくま・けたうをかたらひ、くわしやを引、らいてん・いかつちなりわたつて、天地うちかへすことくにて、時のこゑをつくり、御てんちかく、かみなりひゝきわたつて、くものうちより、大おんあけて、「とく／＼出たまへ」とひつたてゝ、そのくわしやにとつてのせ、「しゆみのいたゞきにのほれ」とけちをなす。そのとき、かの袖を」七ウ

とりいたし、「あめわかみこの袖」ととなへ三とふりたまへは、きしんにかたらはれしけたうとも、「あらいま／＼し。みこのとかめたまひなは、われ／＼までもかんにんなりかたし」とて、すゝむものもなかりけり。しかれば、かのおには、こつせんとして、「いかにたのみかいなきものもかな。ひころ、きはをとき、ほこ・てつちやうをひつさけて、ほうはいともと、めきらめきしたる、かた／＼の、其身をみちんにくたかるゝとも一たひたのまるゝほとこの／＼にて、」八才

さやうにおくひやうにみゆるかきたなし。せめいれ」といひけれとも、さらにみゝにもきゝいれす、しゆみのかたはらに、にけさりぬ。「よし／＼かた／＼かたのまれますとも、この女一人、はからはんに、なにのをそれかあるへき」と、いふまゝに、こかひなとつてひつたてたり。されともひめ君すこしもいたみ給はす。又、あるくらをあけゝれば、たけ一ちやうはかりなるくちなわを数千ひきこめをきたり。「此くらへ、をし入む」とて、ゆきけるに、なをしの袖を」八ウ

ひそかにとりいたしたまへは、くちなわとも、これをみて、かう

へをさけ、なつの天にあへるみゝすのとく、おに、此よしをみるよりも、「これもかなはし」とやおもひけん、かなたこなたひつたてまわるほどに、又、ほのくくと、夜はあけにけり。その時、きしん、いかりをやめ、「いかにひめ君、いまはこれまでなり。さんけにつみをゆるしたまへ。我せんしやうは、人わうのはしめにおうしうにすみしものなり。むまれながら、色くろく、たけ」九才たかく、さなからきしんのことくなり」とて、ちかつく人もなし。ましてことはをかわす事もなく、一しやうさいあひのみちをしらす。とし百年にをよひ、むなしくなる。されは、一しやうふほんのかいりきにて、いま、天上にむまれ、ほとけの國にはすみけれ共、あくしんは、くちせず、きしんのすかたとなりけり。しかるに御身ちきりふかくまします事、我身のむかしをおもふに、しつとたへかたくして、此七日かあひた、あくきやうふ」九ウ
たうのはたらきをなすといへとも、これよこしまのみちなれば、さらに御身をいたみ給はす。此ほととせめにより、もろくのあくこうほんなふ、みなことくくせうめつして、御身もけふより天人となり給ふそや。我も此きやくゑんにひかれて、あつきの心をひるかへして、しゆこしんとならん」と、かうへを地につけて、かいけしけるこそふしきなれ。かゝる所に、みこおはしまして、「いつまでよなくかよふへき。いさらは、ふしやうふめつの仏」十才
となり、みらいやうくにいたるまで、くちせぬちきりをむすはん」とて、ひめ君も、きしんも、ひきくして、ほしのてんにくたり給ふ。「十ウ（挿絵第十四回）鬼が火車で三女をさいなむ場面、十一才
みこの給ふやう、「にんかいなるへき身の、一所にあらん事こそよしなけれ。たゞ月をへたてゝ、七日くにあひ奉らん」とちきり

て、西ひかしにわかれ給ふ。姫君、きこしめし、「こはなさけなきおほせかな。此ほとひめもすにちきりふかくましゝて、わかれて一夜たにあかしかねつる我中を、一年にひとあはんとしたまへは、いかにとてなきたまへは、おもひのなみた雨となり、こひの中川、身もうくはかりに水いてゝ、をのつから川を」十一ウ
へたてゝおはしける。いまの天川是なり、きしむもしゆつせのほんくわいをとけ、まもりの佛となりけり。いまの世のひこほしと申は、あめわかみこ、おたなはた、これなり。姫君は、おりひめとて、めたなはたと申なり。さてこそ、御身のうへにおもひあはせ、しゆしやうのちきりをまもり給ふとそ。

そもく雨わかみこと申は、ほんちせいしほさつなり。ひめきみは、によりんくわんをんのかりににんけんとあらはれかゝるふしきのありさまを」十二才

しらしめむための御はうへんなり。きしんは、あいせんみやうわう、身をわけておにのすかたになり給ひ、しゆしやうにみせしめたまふなり。いかなれば、月の七日にあひたまふへきとありしを、年に一とゞきゝあやまり給ふ事ふしきなりといふに、それにんけんのならひ、あまりにむつまじき中は、つめにわかれのもとひなり。たとひれんりのおもひをなすとも、さのみうちとけたらんは、りへつのはしめなるへし。たゞ」十二ウ

こゝろにおこたらず、なかきちきりを、にんけんにしめさんための御ちかひ、ありかたかりし事とも也。さるほどに、長しやうふは、姫君をいつく共なく、うしなひて、いたらぬくまもなく、たつね給ふか、そのありかをもとめゑす。つねは、ふつしんにまゐりて、「今一たひ、あはせてたひ給へ」と祈り給ふ。ある人申けるは、「長しやのおとひめこそ、此しやうをかへす、天上なさせ給ふ。行すゑたのもしき事かな」とふうふんする。そのおりふし、

長しや、ある夜の夢に、ひめの有さま、うつゝのことくに」十三才

みえたまふ。さてこそあんのおもひをなしたまふ。」十三ウ

(挿絵第十五図「長者夫婦が三女を夢で見る場面」、十四才)

されはそれより、おもはざるに、みかとより、くわんゐを給はり、天下のまつりことをおこなひ給ふに、國もゆたかにたまさかへければ、天にかなへるちうしんなりとて、大しやう大しんに、のほり給ふ。三かいひろしといへとも、我てうは神こくなれば、かゝるふしきもおほかりけり。(終わり)」十四ウ(遊紙1丁分有り)

解題

本書は、公文教育研究会が所蔵する。初めに書誌を記す。①書名「七夕」②整理番号25111125113、③形態、写本。奈良絵本。④冊数、上中下三冊。⑤題箋「七夕 上(中・下)」但し、下冊は剥離し痕跡のみ。⑥表紙、白地に金糸で蔓唐草模様。⑦書形、縦23、4×横16、9糎。⑧字高、縦約18×横約13糎。⑨見返し、金網目。虫食い少々有り。⑩本文、半丁につき10行、1行約17字〜19字。⑪丁数全47丁、上冊16丁(他に遊紙1丁)、中冊16丁(他に遊紙1丁)、下冊15丁(他に遊紙2丁)。⑫挿絵、全15図(上・中・下ともに5図(位置は翻刻参照のこと))

次に、本書と他の伝本の異同について指摘したい。

中世小説『七夕』の伝本は次のものが知られている。

絵巻系

- ① 東京国立博物館蔵『天稚彦草子』写卷子本(上巻のみ)一軸
- ② ドイツ東洋美術博物館蔵『天稚彦草子』(下巻のみ)一軸

- ③ 実践女子大学蔵『天稚彦物語』(黒川真頼旧蔵)写本一冊
- ④ 専修大学蔵『七夕之草紙』(アンベルクロード氏旧蔵)一軸
- ⑤ サントリー美術館蔵『天稚彦物語絵巻』絵巻二軸

冊子系

- ① 大阪府立中之島図書館蔵『七夕』奈良絵本上中下三冊
- ② 京大美学研究室蔵『たなはた』奈良絵本上下二冊
- ③ 静嘉堂文庫蔵『七夕もの語』奈良絵本上中下三冊
- ④ 仙台市博物館蔵『七夕』絵入折本(冊子本の改装)一冊
- ⑤ 公文教育研究会蔵『七夕』奈良絵本上中下三冊。本書。
- ⑥ 京大国文学研究室蔵『たなはた』写本上下二冊
- ⑦ 国立国会図書館蔵『七夕の由來(牽牛由來記)』(高野達之旧蔵)写本一冊(安永五年)の謄写版
- ⑧ 東洋大学蔵『天稚彦(仮題、橘りつ氏は『七夕』等の方が良いとされる)』小型写本三冊
- ⑨ パリ国立図書館蔵『七夕』奈良絵本上中下三冊
- ⑩ 公文教育研究会蔵『七夕物語』絵巻一卷(下巻のみ。元の形態は冊子本)
- ⑪ 某氏蔵絵巻二軸(冒頭部欠損で題名不明)
- ⑫ クリステイーズ本(クリステイーズ・オークション出品本、所有者不明)『天稚彦草子』絵巻上中下三冊
- ⑬ 安城市歴史博物館蔵『七夕之本地』(赤木文庫旧蔵)江戸初期絵巻二軸

このうち、本書は、京大美学研究室蔵『たなはた』と、極めてよく似た本文を有している。しかしながら、本書は、かなり長い脱文を持つ。それは、以下の箇所である。一才の末尾の「しんむ天わうより三代のみかとの御宇にあたつて、長しや一人おはします。」此の後の部分に当たる次の箇所がない。

「ちやうしやに、女君三人まします。」から「されはとて、ふたりのおつとにまみえむ」まで三人の姫君の紹介をする場面のかなりの長文が脱落している。二箇所目は、下冊、一ウで、姫君が天上世界の天稚御子の宮殿に赴いた後で鬼から千匹の牛の世話をするという難題を突きつけられた場面「姫君は、「こはそものちをうしなわるゝよ」とおほしめしけるか、さはなくして」の後から、天稚御子が姫君を慰め、袖を振って難題を解決するよう勧める場面の「くれかたになりぬれは、また、たゝひとりをきて出給ふ。」までの相当長い文が脱落している。

一方、本書の特徴としては、独自異文を多数持つ点が挙げられる。

大蛇が長者に渡した手紙の本文において、本書は

「此事いなどならば、七代まで、そのいゑをほろほし、たちまちめのまへにて、うき事をはやくみすへし。せういんにおゐてはやく川はたに十四けむ四めんのつりとのをたて・・・と作る。その中で、太字部分は、他本に見出せないものである。

また、大蛇が出現する場面で、

くれなひのことくなるしたをいたし、いきつきけるありさま、おそろししともいふはかりなし。

と太字部分があるのは、本書のみである。さらに、天稚御子が天上に帰る部分は、他のどの伝本よりも詳しく分かり易くなっている。

本書 川のおもてにしうんたつて、天人おんかくをそうし、御むかひに、あまくたりたまへはしうんにうちのり、こくうにあからせたまひけり。

京大美学研究室蔵本 川のおもてにしうんたつて、てん人をんか

くをそうし、御むかひに、しうんにうちのり、こくうにあからせたまひけり。

大阪府立中之島図書館蔵本 川のおもてにしうんたつて、天人をんかくをそうし、こくうにあからせたまひけり。

静嘉堂文庫蔵本 天人をんかくをそうし、御むかへにこくうにあからせ給ひけり。

姉二人が妹の幸せな様子を妬む場面では、

二人のあね姫君此よしを御らんして、あきればて、申されけるは、「御身ふしきに御いのちなからへさせ給へは、めてたきに、なにしに、うらみかほにみえ給ふそや。」

とあり、太字部分は独自の異文である。また、姫君昇天の場面ですつのめとも、このひめきみを見あはせ、「さてもありかたき事かな。天人のあまくたり、たゝいま天上にあからせ給ふを、

とある部分の太字部分も独自異文である。さらに、姫君が昇天し、星々に尋ねる場面では、

かのくものにのりうつりさしよりてとい給ふやう、

とあるが、太字部分は他本にみられない。

さらに、長者夫婦が姫君が天上で幸せに暮らしているのを夢で知った場面は、ある人の風聞がきっかけとなっているが、次の太字で示した部分は他本には見られないものである。

長しやふうふは、・・・ふつしんにまいりて、「今一たひ、あはせてたひ給へ」と祈り給ふ。ある人申けるは、「長しやのおとひめこそ、此しやうをかへす、天上なさせ給ふ。行すゑたのもしき事かな」とふうふんする。そのおりふし、長しや、ある夜の夢に、ひめの有さま、うつゝのことくにみえたまふ。

挿絵の特徴としては、次のことが挙げられる。発端部分から、

登場人物の服装はすべて中国風であり、建物もタイルを敷いた異国風の建物となっている。

本書独自の挿絵としては、次のものが指摘できる。第八図で、天上の星々に出遭う場面が姫君と天稚御子の出逢いになっている点が他本と大きく異なる。天稚御子を探していることを絵で表したのかも知れないが、不自然なことは否めない。また、第十二図では、人間の大きさと変わらない巨大な蟻が描かれている。「おほきなるあり」とある本文に対応したものであるが、いくら何でも、極端過ぎて不自然である。第十五図は、長者夫婦が姫君が天上で無事に生活している様を夢見る場面で、白い雲を通して、夢の中の姫君を描いていて、よく情景が分るし、優れたものである。

(附記。貴重な御蔵書の翻刻・解題をご許可下さいました公文教育研究会に対して衷心の謝意を申し上げます。また、閲覧にあたりましては、同会の斎藤章子様、内山岳志様のお世話になりました。厚く御礼申し上げます)



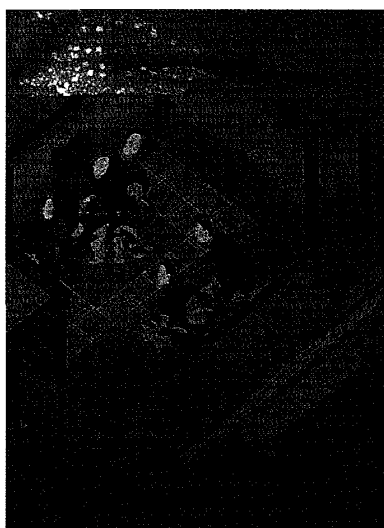
第三図上册八才



第二図上册五才



第一図上册二才



第六図中册三ウ



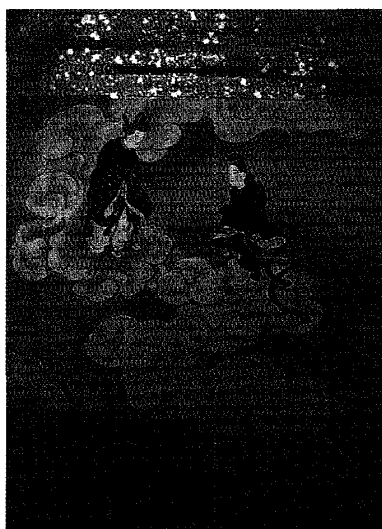
第五図上册十三ウ



第四図上册十一才



第九図中册十三才



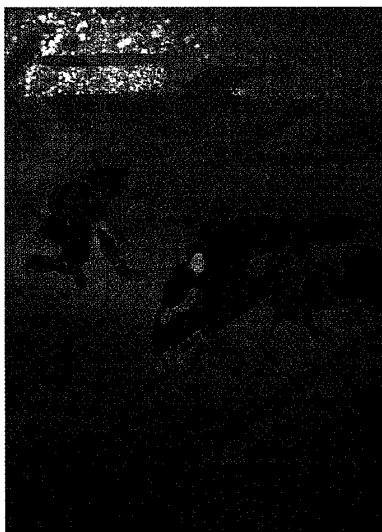
第八図中册八ウ



第七図中册五ウ



第十二図下冊四才



第十一図下冊二ウ



第十図中冊十六才



第十五図下冊十四才



第十四図下冊十一才



第十三図下冊七才